

蘇軾の人生哲学と「書」制作

福光 由布

広島大学大学院総合科学研究科

Su Shi's Philosophy of Life and the Aesthetics in Chinese Calligraphy

Yu FUKUMITSU

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

論文の要旨

本論文は、北宋の士大夫蘇軾(1036-1101)が、仏教や道家の思想に触れながら形成していった自らの人生観を、「書」制作へと昇華させるに至った過程について、詳しく追うものである。

蘇軾は、自作の詩が、朝廷誹謗の罪に問われ、拘禁に遭う。獄中で恩赦を受け、寸前のところで九死に一生を得るも、それ以後、自らに死をもたらそうとした「文字(ことば)」を畏れるようになる。そして黄州流謫以降、しばらくの間、蘇軾は、「文字」を操る一切のこと、つまり詩作や「書」作から遠ざかろうとした。ところが蘇軾は、「文字」に対する畏れから、仏教的修行や道家的修養、更には「書」制作の現場での、「樂(たのしみ)」や「安」という実感、または「無心」なる境地を介して、再び「文字」に立ち返る。その「文字」の力、つまりは詩や「書」などの制作の喜びによって、自らの本来的な「生」を得るに至ったのである。蘇軾の語った「樂」や「安」なる語を、彼の制作を語る際に、闕くべからざる、「生」なる実感として捉え、蘇軾の「書」制作に対する態度やその論を解明することが、本論文の主な目的である。

本論文の構成は以下の通り。第一章では、「蘇軾の『樂』と宗教的経験」と題し、主に蘇軾が仏

教に対して何を希求し、得ようとしたのかを明らかにした。仏教に強い関心を示しつつも、生涯在家を貫いた蘇軾にとって、仏教とは一体何であったのか。このことについて、本章では、蘇軾の実感したで私的な「樂(たのしみ)」の語を、蘇軾の記述の中から引き出し、蘇軾の「書」制作と仏教経験との関連について、詳しく検討した。

第一章にて、蘇軾が仏教的経験を通して獲得したものを確認した上で、第二章では、蘇軾が実践していたという道家の「養生」法が、蘇軾にとっていかなる意味をもっていたのかを詳述した。坐禪に酷似した道家的修練を通して、蘇軾は、あらゆる事象からの自らの解放と、自然との同化とを促す、「安」なる境地に気づく。ここでは、その「安」が、前章の「樂」と同様に、彼の目指す制作態度に深く関わっていることを論じた。

そして第三章では、蘇軾が自らの「書」の制作過程に、仏教的修行の経験(第一章)、道家的「養生」法の実践(第二章)を通して得た「樂」や「安」なる実感を、いかに反映させ、具現化していたかを考察した。

蘇軾という人物は、生涯隠遁せず、士大夫として在り続けたという意味において、儒家的立場を棄てなかった。しかし同時に、積極的に僧侶と交遊し、仏教への関心を強く示したほか、清代には、

その名は「養生」家として広まるほどに、道家の修練を日常の糧としていた。蘇軾の生きた時代では、儒仏道の三教調和論者という存在が示すように——蘇軾自身はそれを認めてはいないが——、これら三教の混在する潮流の中にあつた為、蘇軾のような在り方は決して珍しいことではなかつた。しかし、そうであるが故に、これまでの蘇軾の思想研究には、儒仏道のいずれかの立場に依つてなされたり、或いはこれらを並列するだけで済

まされたものが多い。前者は、却つて蘇軾の本意を見えにくくする可能性をもはらんでおり、後者は、三教に通低する事象があることを見逃すおそれを含んでいる。よつて、本論文では、蘇軾の人生や制作におけるある種の実感というものを、彼の記述から見出すことに努め、そしてその蘇軾の著した実感を以て、従来の蘇軾思想研究の抱える諸問題を解消することを試みた。